

## 第 2 回世田谷区総合教育会議

日：令和元年11月9日（土）

場所：世田谷区民会館集会室

午後 3 時34分開会

○司会 それでは、ここからは令和元年度第 2 回世田谷区総合教育会議ということになります。会議の進行につきましては、保坂区長、よろしくお願いいたします。

(スクリーン使用)

○保坂区長 皆さん、ワークショップ、お疲れさまでございます。これからきょうの教育推進会議の問題提起と皆さんのいろいろお話、それらを踏まえて、教育委員の皆さん方と私とで進めていきたいと思います。

きょうは私の左側から、澁澤教育委員、宮田教育委員、松平教育委員、そして亀田教育委員に、渡部教育長で進めたいと思います。

ここに書いてあります。これまでの歩みなんです、タイトルだけ紹介します。ちょうど 2 年前、幼児期からの豊かな学びと遊びの環境づくり、学びの質的転換と新教育センターの役割、学びの質的転換というところが 1 つのキーワードで、新教育センターはこの 2 年後に世田谷区内に立ち上げていくという場であります。次に、配慮を要する子どもたちと学びの多様性、子どもの可能性を伸ばす学校外の教育環境というテーマ、そして、昨年また出てきました学びの質の転換と新学習指導要領、これは文部科学省の小松審議官に来ていただきました。2 回目に、SDGs、持続可能な開発目標、このときには山籾先生、当時は都立高校の先生でしたが、授業を実際やっていただいて、ワークショップをやったという流れです。

そして、ことしに入ってから渡部新教育長の、先ほどちょっとおやまちプロジェクトというのも紹介しましたが、子どもの自己肯定感を育むということで実践報告をしていただきながらディスカッションするというつくりでございました。

さて、本題に入っていきたいと思います。今の経済産業省、浅野さんのお話は、特に避難所の現場で、つい最近、直面されたお話は非常にリアルで、また ICT ということなので、多分後半でいろんな企業とか、予備校、塾とか、学校とかでこんな例がある、こんな使い方があるというお話が中心かなというふうに思っていたところ、実はそうではなかったと。ICT、PC、あるいはコンピューター自体はツールであると、以上というのが簡潔でわかりやすかったと思います。

実は総合教育会議で学びの質の改革ということをずっとテーマにしてきました。というのは、やはり古くは総合的教育の導入、そして最近ではアクティブラーニング、どうも学びのあり方の骨格そのものをつくり変えていかなければということが急速に言われるよう

になった背景には、やはりグローバル時代の中で、どうも日本の社会から、企業からがんがん新製品が出て、世界中を席卷した時代は本当に過去のものになってしまったかのような、ちょっと勢いがいない状態が見られる。そして、どうも我々が当たり前だと思ってきたその学び方、教育の受け方、あるいは教育の仕方、そのものをやはり根本的にもう1回見直さなければいけないんじゃないだろうかということがやはり議論になってくるということでもあります。それが文部科学省の新学習指導要領の中にも、主体的で対話的な深い学びというような、やや哲学的な言葉で語られているんだろというあたりをお話ししてきました。

澁澤先生にまずお尋ねしていきたいんですが、たびたびこの総合教育会議で、近代の教育、明治の学制発布以降の近代教育以前に、江戸時代には寺子屋が大変発達して存在していたと、あるいは幕末の長崎につくられたオランダから学んだ海軍伝習所などのお話を、実に生き生きと、学びはリアルな、まさに今を生き抜く現場と直結をしていて、まさに実学であつたらうと。まさになぜ学ぶのか、何を学ぶのかということに誰もが答えられる、そのことを問うまでもないという時代だったと思うんです。しかしながら、だんだんと学歴社会というのができてきてまして、これは結構明治時代の中盤過ぎから末は博士か大臣かと、立身出世というこの4文字が、ある種の身分制社会を打開する1つの大きな社会の変革として起こって、この中で各教科をくまなくしっかり覚えて、正確にこれを再現していく力というようなことが受験勉強で試され、そしてリアルな現実という意味では、そこをちゃんと受験戦争を突破すれば約束された人生が待っていると、他の人たちよりも高い収入とか、あるいは尊敬が得られるとか、そんなような時期が、実は戦争を挟んで戦後特に大衆化したんじゃないかということです。立身出世のところの部分は少し山は小さくなったと思いますけれども、人並みにというようなところで、受験の成果のために学ぶ、これは、そんなことを聞くまでもないという時代も大分長かったと思います。

澁澤先生なんですが、日本中の限界集落で学生さんとともにフィールドワークをされて、これまでの総合教育会議でも身体性を取り戻す、学びの身体性ということをたびたびおっしゃってられました。また、その限界集落の中に、多分古代以来築いてきた厳しい自然と直面して生きてきた庶民というか、人々、農民だったり、こういった人たち、皆さんの厳しさだとか、おそれだとか、優しさだとか、相互扶助だとか、知恵だとか、哲学など、そんなバックグラウンドも多分あるように私は感じたんですね。というところから見て、ICTというツールに今直面して、どのように澁澤先生はお考えになっているかという、

まずそのあたりからいきたいと思います。

○澁澤委員 非常に最初から哲学的なお題を頂戴しました。きょうICTの会議なのに、ちょっとそこからそぐわない話になるかもしれませんが、私も本当に、さっき区長がおっしゃったように、ICTの導入というのは、私たちが文字を持ったときとか、あるいは私たちがノートと鉛筆を持ったときと、それと同じような意味合いになってきている。つまり、ICTを使って何をやるかということを考えなければいけない。今の社会に何をやるかではなくて、教育の場合は、未来の社会に対して何ができる子どもたちを育てていくか、多分その辺が今度の指導要領の変更につながってきたと思います。それこそ、今の小学校の高学年の65%の子は、就職するときには今存在しない職業につくとか、あるいは47%の仕事がこれから10年か20年でなくなっていく。一番なくなる仕事は教員というのがまたおもしろいのですけれども、そんな論文が出たりとか、そんなときに、多分、今、区長がおっしゃっていたように、ICTという機材を使うことによって、働くということの質だとか、それから、社会のあり方というのが劇的にこれから変わっていくんだろうなというふうに思っているんです。そこで教育が一体何ができるのか。

私は、先ほどの浅野さんのお話を聞いていて、1カ所とっても印象に残ったところがありました。会社に来て何時から何時まで束縛されて同じことをやるということは全く意味がない。ICTを使うことによって、例えばうちでテレワークをすることで十分だということもあるのだという話をされて、そうしたら子育てができるでしょうというお話だったんですよね。これから10年か20年たったときの労働というのは、テレワークをやることなのか、子育てをやることなのかぐらいの根本的なことが問われているのだと私は思うのです。

というのは、私の時代は完全に経済、私は20代は遺伝の研究者と、それから技術者として海外で品種改良の仕事をずっと教えるということが仕事でした。30歳で帰ってきて、30代は何をやっていたかという、ハウステンボスですとか、観光事業の立ち上げで、世界中から3000億円ぐらいのお金を集めて、それをどう経営するかということが私の仕事でした。これは違うなと思って40代でやめて、海外のNGOでマングローブの植林をやっていて、50代から日本の森ですとか、地域に入っていきようになりました。そのときずっとやっぱり考えていたのは、働くってどういうことなのか、それから、働くということが、そもそもやっぱり幸せになるために働くということが原点で、それをどうやって子どもたちにつなげていけるのかなということがいつも頭の中にあります。

その意味で、さっき言ったテレワークが仕事なのか、子育てが仕事なのか。私の時代は明らかにテレワークが仕事だったんですよ。それは経済性と効率性と合理性が通じる世界です。そこにICTはものすごくフィットします。私は、これからの時代、その部分がすごく少なくなることによって、できた時間で社会課題を解決できるじゃないか、まさにそのとおりだと思います。子どもたちの時代に、そのときの社会課題って一体何なのでしょう。私たちの時代は、子育ても介護も、そういうようなことは労働ではなかったんですよ。先ほどおっしゃったように、大会社に入ることが社会的ステータスであったりとか、年収が多いことが社会的ステータスということで一生懸命この日本をつくって来ました。それがどうなったか。確かに日本はグローバル化がおくれてはいますが、世界経済の中では第3位の経済大国になって、そしてそのグローバル経済が何をつくったかという、26人の人の持っている資産が、下位の38億人の資産を上回るという状態をつくって来ました。つまり、私たちが経済というものの基盤にしていた金融ですとか、その仕組みが、もう今まさに変わろうとしているときなんだと思うのです。

経済の仕組み自体がこれから変わっていくときに、社会の仕組みが一体どうなっているかという、非常にある意味では難しい現状を与えられている。そのときに、じゃ、その幸せというキーワードから見たとき、先ほど経済というキーワードから見たら、効率性と合理性がキーワードでしたけれども、幸せという基準から見たときは、先ほど区長がおっしゃった身体性ですとか、あるいは自分が自然とつながっている一体感ですとか、あるいは先祖とつながっている一体感ですとか、その中で自分がどういうふうに感じられるか、そういう関係性とか身体性というものが一方でとても幸せだと思える社会には重要なのではないかと考えます。

その社会をどういうふうに子どもたちに与えていけるか。今後、ICTがどんどん導入されていって、経済がなくなるということはありませんから、経済性の部分というものをある意味では圧縮することによって、そちらの部分これから教育の現場でどうやって与えられるか。逆に今私たちが考えなきゃいけないのは、ICTにどう対応するかというよりも、ICTによってできたそのすき間の部分に、一体これからの社会のどういうことが重要なのかという教育を一体どのように当てはめられるか。教育は何も学校教育だけではないかもしれないし、いろんな多様な教育があるわけで、そっちを今本当に私たちは真剣に考えておかないとならないと思います。さて、便利になりました。だけれども、子どもたちにとって結局それを拾ってくれるのがゲームというネットワークしかありませんでし

たとなつたらば、それは本当に世の中の悲劇だし、子どもにとっても悲劇だと思うのです。

そんな中で本当に今私たちが考えなきゃいけないのは、自分の人生の意味を考えられて、それを体験していくことができる場が学校でありたいと思いますし、自分の人生が何のために生きるのかということ子どもたちにどう考えさせ、感じさせるかという仕組みをどれだけこれから学校現場で創り出していけるか。そのときに、一体子どもたちがどう考え、行動するのかというあたりが、これからの私たちのICTが入ってきた中での非常に重要なテーマになるのではないかなと思ひながら浅野様のお話を聞かせていただきました。

○保坂区長 ありがとうございます。大変無理な問いかけにしてみました。でも、澁澤先生がおっしゃったのは非常に画期的なことで、ICTが入ってくることで、今まで1枚1枚書類をめくりながら、ここに判こがあるだろうかとか、いろんなことをチェック、自治体でもやっていますし、恐らく学校の職員室でもそれに類するような作業も多いと思うんですが、そういったこと、あるいは労力、時間はかかるけれども、それほどスキルアップしないようなことについて機械が代替していくのであれば、そこで生まれた時間をもう1度、育児も含めて、人であること、そして他者がいること、お互いが違う見解を持っていることや、意見を合わせることもできるということなどを学んでいくという可能性が逆にできてくるんじゃないかと。

避難所の話は、このICT時代と教育というのは、子どもの話ではなくて、実は先生の話であり、親の話であり、あるいは高齢者の話なんですね。やはりお任せしますという人は多いけれども、どうしようか、こうしようよ。うまくいかなかったらおまへのせいではなくて、みんなで乗り越えようという社会に、日本社会というのは少し前まではあつたはずなんですね。そういったことも浅野さんのお話と通底したと思います。

そこで、今度、松平委員なんです。学校の先生でいらっしゃって、校長先生を経験し、体育の先生でいらっしゃると同時に、アメリカ・シカゴの日本人学校の校長先生も体験されて、日米の教育の違いとか、子どもの表現の違い等も体感されていると思います。きょうのICT、特に道具としてのICTをどういうふうを活用するかという視点でお話をいただけないでしょうか。

○松平委員 私がシカゴにいたのはもう11年前なので、その時とは少し子どもの様子も変わっていると思いますけれども、学校の教育、つまり学校で何を教えるか、日本とアメリカの教育に対する意識の違いについてお話ししたいと思います。まず、日本の場合には将来のため、安定した生活を得るために学ぶと言えらると思います。ところが、アメリカでは、

一人前の大人になるために学ぶということに重点が置かれています。この辺は徹底していました。それから、アメリカの子どもたちは主体性と当事者意識という点で、日本の子どもたちに比べてはるかにあったと思います。日本の子どもたちは、こういうふうにしなさいよとマニュアルを与え、そのとおりにやることは得意なんです。自由にやっごらんとすると、途端に困ってしまう子どもが多い。その点アメリカの子どもは自由にやっごらんとすれば、試行錯誤でいろいろ挑戦することが多かったように思います。確かにパソコンを与えて何でもやっごらんとした時、日本の子どもはアメリカの子どもに比べ、そんなに熱心にやるわけではありませんでした。ただ、今はそのころから比べるとスマホの影響もあるので、子どもたちも随分変わってきているのだろうと感じています。

先ほどいくつかのグループを回ってみました。教育の情報化によって学校はどう変わらなくてはいけないのかということが話題になっていました。そして、やはり大人、つまり教師が変わらなくてはいけないという声がずいぶん聞かれました。では、教育の情報化によって教師に何を求めるのかということ、私は学校では情報活用能力が今にも増して必要になってくるし、ICTを効果的に活用した教科指導が求められると考えます。私自身も大学の授業でタブレットを4人1組のグループに持たせて、演技を撮らせながら、その結果を活用させるということは、すでに導入しています。学生には、これからの教師は学校現場でタブレットが導入されるから、君たちもそれを活用した指導法をマスターしなければいけないよと言っています。それから、教員の仕事の軽減負担という意味でも、校務の情報化も大事だと思います。しかし、何よりも子どもの学びの多様性を保障してあげることが重要なポイントだと思います。

いまだに現場では、俺には無関係だと言って、ICTには全く目もくれない教員がいます。でも、外国も含めて社会全般で、これだけICTの活用があり、紙とチョークと黒板だけで済むという時代ではなくなってきていますので、学校でも導入・活用しなければなりません。

大切なのは、単にICT教育を推進するだけではないということです。子どもたちにこういう力をつけさせたいからICT機器を推進するんだ、ということが明確でなくてはなりません。例えば、どの教科の、どの単元の、どの場面でこれを用いれば有効かということ教師自身がわかっていなければならないのです。そういう意味では、授業で学生にタブレットで動画を撮らせているのですが、その中から問題点を発見するのはあくまでも人間なんです。そして、問題を解決するためにAIを活用する。つまり、問題発見能力

はやはり人間に委ねられているのです。今、このように大学で指導しております。

○保坂区長 ありがとうございます。ただいま、大学入試における国語の記述式の採点の問題が大変論議を呼んでいるんですが、恐らく今の中学生、高校生ぐらいですか、やっぱりスマホに打ち込む略語とか、同世代で通じる言葉も大分多くなってきていて、ちゃんとした文章を書けるのかなと、あるいは文章が本当に読めるのかという部分で、これまで黒板で書いて、それをノートに写していたという時間がある種なくなっていくと、ますます書かなくなるかもしれないというときに、文章の構成ってこうなっているんだよと、こういうことを言いたいときは、こういう順番で言葉を配列するんだよとか、あるいは、この文章の読み方はここだよみたいな、そういうことってもっとももっとちゃんとやらないといけないなというふうに思います。そういうことが、もしICT教育を進める中で、今度はできる時間がふえるのであれば、歓迎だなと思います。

宮田教育委員のほうに、今度は親の立場で、今1人1台というお話が浅野室長からありました。国もそこに力を入れていくんだと。これは1人1台がどのぐらいの速度で広がっていくかわかりませんが、世田谷区でも、残念ながら1学校に1クラス分まではやったんです。そこまでは行っているんですが、そこからさらにハードルはあるんですけれども、そういう方向としては、これをツールとして使っていくのはもう議論の余地はなく、やっていこうということにはなっていますが、さらに今各テーブルでごらんになって、どんな課題とか、お感じになったことをお話しいただけますか。

○宮田委員 AI等の技術革新が進んでいく新たな時代においては、学校も含めてICTを活用した学習の場が不可欠なものとなっているということが、実際に区内の小中学校の授業を拝見して実感しております。ICT機器を使った授業等の事例にもありましたが、本日は浅野様のお話を伺い、子どもたちの未来に向け、学びについて様々な角度から考える場となりました。

先程のワークショップで、各テーブルを回らせていただきましたが、保護者の御意見で、スマホに関するセキュリティーの懸念ということが多く出ていて、その対策には、家庭で一番身近にいる保護者が教えることが必要だということでした。親子で話し合い、使い方についてルールや約束事を決めているご家庭もございます。また、子どもの年齢によっては、これはやっていいこと、これはやってはいけないことを説明することが大切というお話もありました。私たちの世代はマニュアルをまず見てから使うといったことが多くあったかと思いますが、今の子どもたちは、スマホを手にしたら、操作しながら、あっという

間に使えるようになります。スマホというのは、子どもを見ていまして、大学との連絡事項だったり、リアルタイムな情報取得だったり、色々な場面で生活には必要なものになっていて、そういったことも大人は理解している中で、家庭でも、子どもがICT機器を安心して使える環境をつくっていくことが大事ではないかというお話も出ていました。

新たな時代に対応するためには、今までの知識・経験を活かしながら、固定概念に囚われず、ICT機器の活用など、子どもの可能性を引き出す教育を進めるには、どういったことが必要なのか、私自身、親も含めて周囲の大人がまずそれを理解することが大切だということ、大変実感いたしました。

○保坂区長 ありがとうございます。スマートフォンの中で、どうしても子どもたち同士のおしゃべりがずっと続いているという問題もあって、そのおしゃべりが結構夜遅くとか、お風呂に入っているときも返事しなきゃとか、やや過剰なところもあって、そのあたりは、スマホはこの時間以降はやらないよとか、そういうことも必要なというふうにも思いますけれども、と同時に、学校の中にやっぱり導入されてくることに関しては、もっともっと議論というか、きょうみたいな場をこれからも重ねていくべきだなというふうに思います。

それで、亀田教育委員は、文部科学省で実際に教育、特に不登校の子どもたちの教育機会の保障に当たられたこともあり、現在は発達障害も含めて、さまざまな不得意なところとか、課題を持つ配慮を要する子どもたちのための個別の学習教材や指導法の開発に当たられている民間企業にいらっしゃるんですが、まず世田谷の教育にICT導入と、浅野室長のお話を受けていかがでしょうか。

○亀田委員 ありがとうございます。ICTの意味というか、ICTによってどう変えていけるかということ、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。私も幾つか考えてみたんですけども、まず第1は、楽しい、お子さんを引きつけるものがある。やっぱり学ぶことに対してお子さんが興味を持つことができる、そこがまず一番大きなメリットかなと思います。

2点目が、浅野さんも、多様性を理解し、尊重すると言われていましたように、多様な学びを実現する。自分に合った学びを選ぶことができるということも大きいと思います。個別に最適化された学習ということで、1人1人の学習状況に合った内容を学んだり、あるいは動画で学ぶことが合っているというお子さんであれば、動画で学ぶことができたり、さらに、場所を選ばないということも大きいかなと思います。

今、区長からもお話しいただいた、例えば不登校のお子さんであれば、自宅、家庭であったり、あるいはほっとスクールで学ぶときに、学校でもそうしたコンテンツを使うし、その同じようなコンテンツで自宅でも学べるし、ほっとスクールでも学べるし、あるいは民間のフリースクールでも学べるしということであれば、例えば学校に行けなくて、学習がほかのお子さんよりおくらしているんじゃないかということで、学校に戻りにくいお子さんであっても、授業で使うコンテンツで自宅でも学ぶことができれば、自信を持つこともできるのではないかなと思っています。学校の外で学んだことも、学校の成績としてもある程度反映できるということになれば、それはとても意味があることと考えます。学校でのICTの導入とともに、ほっとスクールでもそうしたICTの導入によって学ぶことができるということにも、私たちで取り組んでいきます。

3点目は、先生方にとっては、お子さんの学習状況をリアルタイムで見ることができるというところも大きいかなと思います。今であれば、机の間を先生方が歩きながらお子さんのノートを見てということ、なかなか全員を見ることができないということもある。ICTを活用すれば、机の間を歩きながらも、タブレットでお子さんの1人1人の状況をリアルタイムで見ることができるともあると思います。

先ほど濫澤委員も、浅野さんも言われていた、これまでは同じ場所でみんなが集まるといったことだったけれども、これからはそうではないというお話もありました。学校を訪問させていただくと、時々、教室に入れないとか、入らないお子さんがいます。ある小学校では、教室のすぐ目の前の廊下で座って自習しているお子さんがいました。今まではそうしたお子は、なかなか先生の届かないところで学ぶということになりますけれども、ICTを使えば、そうした教室外で学んでいるお子さんの状況も、先生はリアルタイムで見ることができて、ここはよく頑張ったねとか、ここはよくできたねということもお子さんに伝えることができるんじゃないかなと思います。

最後に、お子さん同士でほかの友達がどう回答をしているかというのを共有することができる。そうしたときに、みんなと同じ答えでもいいんですけども、みんなと違うちょっと変わった答えをしたときに、それはおもしろいねとか、それはいい考えだねということやぜひ先生からそのお子さんたちに伝えていただく。同じでもいいし、違ってもいいという世田谷の教育になってほしいし、していきたいなと思います。

○保坂区長 ありがとうございます。

それでは、渡部教育長、浅野室長のお話にいろいろアンダーラインをマーカーペンの色

を変えながら、附箋を張って熱心に聞いておられました、どんなふうにとめられたのでしょうか。

○渡部教育長 きょうはお話、どうもありがとうございました。私は、浅野室長のお話を聞きながら、ICTの話だったんですが、やっぱり学びを変えていくということを非常に強く感じました。私は、室長の話から、こんな形の学びというのを整理してみました。

まず1つ目が、課題を見つける力、これがなかなか重要だということを感じました。災害のときの体育館の様子から、誰も課題に感じないというところがあって、私たちは、確かに仕方がないというふうに思ったり、そういうふうに割と素直に感じてしまうところがあります。子どもたちはどちらかというと、生活と学習が結びついていないので、勉強は学校でやるもの、生活は別にするものというふうに考えているので、学習に意欲が持てないというところがやっぱり形として見えています。そのことに対して課題感みんな持っていて、少しずつ変えてきてはいます。例えば速度の学習をしたときには、新幹線で行ったほうが速いのかとか、車で行ったほうが速いのかとかという問題も出てきつつはあるんですが、でも、なかなかやっぱり難しく、子どもたちの周りには解決しなければいけない課題がたくさんあっても、子どもたちが気づかないということ、それからもう1つは、私の力ではどうにもならないと感じていること、私はそこも大きいかなというふうに思っています。だから、小学生、中学生のうちから自分の力で解決できたという経験を子どもたちに積ませる必要があるんだなというふうに考えています。

それから2つ目に、浅野室長の話の中からあった解決策のオプションを並べる力、私たちは今までは、子どもたちは学んだことの知識の中からフル稼働して、その中からいろんな答えを導き出していました。でも、これからは情報社会ですから、新しい情報をどんどん得ながら、その中で一番いい解決策のオプションをつくっていくことだと思いました。それは、やっぱりネットからもあるし、それから友達から、人から、地域の方から得た情報の中から一番いい解決のオプションを並べる力をつけること。

それから3つ目に、やはり必要なのが説得する力だと思います。とても素直に聞いていて、そのままわかっていても、なかなか伝えられないというところも子どもたちの中には見られます。だから、国語の力をつけるのか、得た情報を説得力のあるものにつくり変える自分の力という力が必要なんだというふうに思いました。それは、表現力だったり、それから視覚に訴えるものを自分でつくるのが、そういうふうなアレンジをする力を子どもたちにつけなければいけないというふうに思いました。

それから4つ目が、実行する力です。やっぱり実行するためには、共同する力だったり、コミュニケーション能力が必要になったりします。今、会社で就職するときが一番求められるのはその力だと聞いています。だから、そういう力も子どもたちにつけるような教育にこれから先変えていくことが必要だというふうに、きょうのお話の視点から整理すると、そういうふうに思いました。

それから、私は室長の話の中で一番そうだと思うのが、ICTはもう使いこなすための道具ですとはっきりおっしゃってくださったことです。やっぱりまだまだICTをそういうふうと考えられないような教育も中にはあります。例えばPETSというゲームのようなものがあって、あれは幼稚園で使えばいいのかなというふうに思ったりするんですが、升目の中に置いておくと、こういう箱みたいなものなんです、右に行くとか、左に行くとかということ自分で指しながら、それに命令を出すことができる。それで、障害物を乗り越えていくにはどの道を通っていくかということ子どもたちが考えていきます。だから、そういうふうにも思考も、これはこういうふうにというふうにも、プログラミングする力が必要なんだなというふうにも思いました。

それから、個別最適化というところが、私はやっぱりこれから求められる一番大事なところだというふうに思っていて、そういうふうな教育に変えていく必要も感じています。先ほど亀田委員からもお話がありましたが、1人1人に合った教育、だから、個別最適化して筋トレが必要、筋トレもしながら楽しさも味わうというふうなものをやっていくという必要があります。それから、そっと戻れるというところが私は好きでした。みんなの前で手を挙げてわかりませんというのはなかなか難しいけれども、自分の中でそっと戻ってこれをやってみるということができればいいのかというふうに思いました。

教員は、子どもがどこでつまづいているかというところを理解する力が一番大切です。でも、それはなかなか難しく、子どもが足し算のどこでつまづいているのか、掛け算ができないのか、なぜこの問題ができないかというところがなかなか難しいです。それを個別最適化の中で自分も試せる、自分はここがわかっていなかったんだというところを教えてくれたものに戻れる、そういうふうなもののICTは使い方としてできればいいなというふうに思っています。

長くなったんですけども、あと1つだけ。教員の意識の改革が一番大事だというふうに考えました。私たちは、やっぱり子どもが傷つかないようにと思っている余りに、完璧なものを求めている。だから、6割でオーケーという考え方がなかなかできないです。や

っぱりそれは子どもが傷つかないように最適なものを、一番いいものを子どもに与えたいというためです。だから、そういうところも変えていく必要があるなということを感じました。

済みません、長くなりました。

○保坂区長 今、一巡したわけなので、報告していただいた、問題提起していただいた浅野室長に、教育委員全員のお話を聞いてちょっとコメントを。

○浅野室長 ありがとうございます。最後の教育長にまとめていただいたところというのが本当にそのとおりでございまして、あと教育委員の皆さんともこういう意見交換ができてとても有意義です。

きょう本当に申し上げたかったこと、きょうテーブルを回っていて本当に思ったのは、ICTというものについてのやっぱり認識はそろっていないなという感触は受けました。あとはICTというのは、大人が勝手にとても怖いもの、とてもリスクなものというふうに、やっぱり子どもがかわいいというところから、どうしても遠ざけたいというところに行っちゃう可能性というのものもあるなとは思いました。だけれども、多分子どもたちはもうデジタルネイティブの世代なんです。要するにデジタル機器に向かい合って、デジタル機器は使いこなしてというのがもう本当に基盤の基盤になっちゃうという世界でこの子どもたちは生きていくということは、もう大前提なんだということは認めてあげるとするのはすごく重要なことなんじゃないかなというのがまず1つございました。

あともう1つは、私、実は、きょうICTってこういうイメージですということが一番申し上げたかったのは、最後のほうに私が申し上げた事例なんです。私が長野県に災害派遣で行ったときのうちのチームの連中とLINEグループをつくって、おまえら全員車で、きょう1日で全避難所を回ってこいと、全ての現場の実情をレポートしろと、それは簡単なメモと写真で送ってこいと、全部LINEに送ってこいとやったときの話です。先ほどお話ししたとおり、それで誰かがいいレポートをつくってくる。ばばばと打って、いい写真を撮って、すごくいいコメントを出してきた。そうすると、みんなが見るわけです。見たら、俺はこれが足りなかったわと思って、そいつに影響を受けて、ほかのやつらもその視点でレポートを始める。また新しい視点を見つけてきたやつがいると、そのほかのやつらも影響を受けてという感じのプラスのポジティブなスパイラルが一気に回り始めるんですよ。

さっきから、やっぱりICTというと、効率化というところにすごくフォーカスが行き

がちなんです。効率化は間違いないんですよ。普通に入れたら、ICTって絶対に負荷がふえていく手仕事になっていたらおかしくて、絶対みんなが楽ちんになっていく方向に行かなかつたらおかしいんです。だから、絶対楽になっていくし、みんなが楽にコミュニケーションができて、無駄な時間を過ごさなくていいようになっていくという効率化の側面とともに、今私が申し上げた知の創造が始まるんですよ、すごい楽ちんに。あいつが言っていたあの視点はすばらしい、じゃ、俺はこれを次に足そう。またその瞬間、それが共有される。それは、言葉も写真も映像も何でも使ってコミュニケーションできる。学校がいきなり知的創造の場になるんです。

さっき、きょうお話しされた中で、皆、委員の方々からも出てきた話を私がキャッチしたメッセージが間違っていなければ、つまり学校を知的伝達の場じゃなくて、知的創造に変えていく場なんだという、時間的な余裕を生み出すこともそうだし、コミュニケーションを変えていくということもそうだし、その魔法のつえなんです。魔法のつえであることは間違いないので、単なる道具じゃないと思います。だから、いい道具なので、その知的伝達をどれだけ効率化できるかということと、本当の知的創造です。みんなでいいアイデアをつくっていこうよ、みんなでピンチを切り抜けようよ、みんなで明るい未来をつくろうよと、そういう話になれた子どもたちというのをどうつくってあげられるかのあれですし、あとはさっきのひゅっとちょっと戻れると。俺はちょっとこれはわからないけれども、ちょっとみんなの前で手を挙げるのは恥ずかしいけれども、戻ろうという自分自身の問題解決も可能にするし、いろんなことができてくる便利な道具なんだと思います。

なので、きょうすごく長い時間、私、課題解決の話に時間を費やしたのは、ICTというこの話の細かいことを言っても、ちょっと本質を外しちゃう気がしたので、今のことをお伝えしたという感じでございまして、意識を非常に共有させていただけたなと思ひまして、よかったです。ありがとうございました。

○保坂区長 コメントありがとうございました。確かに学びは、これは澁澤先生にまた戻りますけれども、いわゆる近代教育の以前は、立身出世とか、受験とかも意識せず、みんなわからないことを解決していこう、沈むかもしれない船を沈まずに嵐に耐えるように設計していこう、操舵していこう、こんな非常にシンプルな、だけれども、みんなで知恵を出す。足らざるところがあれば、それに気づいたやつがフォローするという仕組みだったと思うんです。これがあるときから、要するに教室の中でライバルになっちゃったんですね。点数をある程度とっている子同士が、間違っただけ理解をしても本当のことを教え

ないみたいな、あいつが成績よくなっちゃうからみたいな、そういうちょっとこすっからい時期も結構長くあって、でも、もう1度学びの原点に戻って、これだけ複雑多様な社会、気象異変もひどい、こういう社会をやっぴり誰かが全部1人で仕切るのではなくて、知恵を出す社会、このあたりの可能性についていかがでしょうか。

○澁澤委員 智恵というのは本当に難しく、多分、昔の知恵というのは、地域社会の中で社会教育として伝えられていた。例えば祭りもそのツールの1つですし、それから農作業などの共同作業もそのツールの1つだったのかもしれないです。それと学校教育というのが分けられて、要するに知識を得る場と、それから知恵を得る場というふうにある程度区分されていて、もっと言えば心を得る場が家庭教育であってという、その3本柱で日本社会はずっと来たのが、今何となく全部を学校教育の中に望まれてくるような社会になってきた。

今、まさにICTを使って大分ほぐして行って、そしてもう1回それぞれの教育を利用できる、できやすい形に進むのかもしれないんですが、一方で、きょう多くいらっしゃる学校の先生方が、多分全く今までと違う評価基準を持たないと評価ができないという現状に直面するんだと思うんです。例えば1つ、区長が今おっしゃった過去の例でいうと、例えば幕末のころに適塾という緒方洪庵がつくった有名な塾があります。そこから多くの人材が出たんですけども、あとき適塾は、みんなでフランス語を習って、みんなでオランダ語を習って、みんなで造船技術を習ったわけじゃなくて、みんなばらばらにやっているわけです。福沢諭吉は英語をやっている、横で大村益次郎は砲術をやっているという、だけれども、それがそれぞればらばらにやっているけれども、塾生同士がお互いを評価して行って、そして緒方洪庵がある意味で方向性を与えながら、それらを関係づけながら全体的に伸ばしていく。先ほど浅野室長がおっしゃっていた、まさにそれが今ICTの上でそういうようなことがこれからできていく。

つまり、私たちがやっぴりここまで到達したからこういう評価という評価をもう1回考えなおさねばいけない時代が来るのかと思います。それには、その評価をするためには、社会がどうなのかということも見なきゃいけない。例えば先ほどの画面の中で、これは私の専門分野なので、ちょっとお話ししておくと、私の時代から農業の機械化とか、それから環境要因の分析は重要と思われていました。私はオランダに関連する仕事をしていましたので、オランダの施設園芸の連中たちと、どういうやり方でいかにコンピューターでコントロールしながら農業を効率的にやっていくかということはずっと突き詰めてきまし

た。多分オランダは今世界一のIT農業大国になっているんです。それは、農業という産業をどう効率化していくかということなのです。

一方で、日本の農村を見てみると、今、日本の農村の約8割の農家は赤字なんです。変な話なんですけれども、お米1俵、皆さんが買われる60キロなんです。60キロを今つくる原価が大体1万6000円ぐらいなんです。それをJAが買い取ってくれる価格というのは1万円なんです。つまり6000円の赤字を出しながらも、お百姓さんは田んぼをやっているのです。何でやっているかなんです。それは、1つは、私が聞いていた限りでは、育てる喜びであったりとか、自分のつくったものを自分で食べる喜びであったりとか、そのつくったものを人に送ってありがたがられる喜び、ある意味で自己有用感というようなことです。そういうような価値観とか、言葉であらわせない感覚の部分というものの豊かさが幸せに非常に直結している。それは経済的価値よりもまさると思っている人たちが多いので、確かに休耕田は多くなりましたが、春になると田んぼに稲が植えられるという状況がある。その辺の価値観も、学校現場でいろんな子どもたちがいろんな試みをする中で、ミーニング・オブ・ライフ、自分は何のために生きて、何を幸せと思うのかというあたりを引きずり出していく。ICTを使ったり、あるいは地域内のディスカッションを使ったりとかということで引きずり出していくという手法が、逆に教育の現場ではすごく求められるのかなと思って、きょうは1日聞いておりました。

○保坂区長 宮田委員に伺いたいんですが、やはりきょう、この3年間ずっと総合教育会議で、学びの質の転換とか、改革とか、刷新、改善とか、いろんな言葉で学校現場が変わってほしいなということを書いてきましたが、一番難しいのは、保護者の、親の中にある全て任せましたからという意識だったり、任せたけれども、ミスは許しませんみたいな、実は任せていないんですね。というような声に非常に神経質になりというか、実際大きな声で非常に頻度も高い声だったりもしますけれども、なので、やはり平均的に変わったことをせずに、与えられた環境の中で平準的にやることというんですかね、学校の先生方がですよ。ということ、親たちのあり方がつくってしまっているんじゃないか。学校を応援するとか、支えるという意識がどうだろうか。それは私の考え方がちょっと違うなら修正してほしいんですが、学校を変えるというときに、親も一緒に担い手になっていかないと難しいと感じるんですが、いかがでしょうか。

○宮田委員 学校は地域コミュニティーの核と言われております。学校行事等、様々な場面で保護者の皆様・地域の皆様のご尽力・ご協力をいただいております。家庭教育に関わ

る当事者として、また子どもを学校に通わせている保護者としましては、子どもの健やかな成長を願い、より良い環境の中で子どもを学ばせたいという想いは、皆、同じようにあると思います。区長から質問がございましたが、中には難しい現状もあるかと思えます。原因の一つはコミュニケーション不足だと考えます。保護者会等、学校全体での先生・保護者とのコミュニケーションの場や、親同士のコミュニケーションの場に保護者がお仕事や下の子の子育て等、様々なご家庭のご事情で参加できないことが増えています。学校に行きたくてもなかなか行けない保護者の方もいらっしゃいます。今までの総合教育会議のテーマにあった幼児教育に関することや、これからの学校教育に関すること等、保護者も一緒になって考えていくことが大切だと考えます。子どもが小さい頃から、身近な地域とのコミュニケーションの場だったり、同世代の子どもを持つ、親同士の何でも話し合えるような場だったり、お茶を飲みながらのちょっとした場でもいいですので、人と人の繋がりができるといったことが大切で、子どもが成長して学校に通うようになってからも、その繋がりが続いていくことになると思います。

また、学校が今どういう教育を目指しているのかを、保護者と共有し、保護者が学校を知ることから始まると思っております。

保護者の皆様は、ご家庭のご事情や、多様な生活スタイルがあり、また、様々なご意見もございます。PTA活動は、児童・生徒支援ということで、学校支援をしています。今、PTAの中で参加し易い活動を目指し、様々な工夫や活動について話し合いながら進めているということを伺っています。子どもを中心にして、家庭・学校・地域が皆でこれからの未来を担う大切な宝であります子どもたちを育てていこうといった観点で、保護者が学校との関わりを考え、その中から協力体制が生まれていくといった機会をもっと増やしていけたらと思っております。

○保坂区長 では、今度、松平委員です。先生の立場で、浅野室長からも部活の、ちょっと時間の関係で十分触れられなかったかもしれないんですが、教員に対する負荷をやっばり低減していこうと。やっばりセブーンイレブンと言われていて、かなり残念なことに、教職希望の倍率が下がっていますよね、劇的にと言っていいぐらい。こうなってくると、やっばり学校の先生って、本来、さまざまな深い感動や出会いや喜びがあるすばらしい職業だと思うんですが、肝心の若者たちが敬遠をし始めているのは、余りにもいろんなことをやらなければいけない。今、ICTの話をしていますけれども、英語も入ってくる。それから、生徒指導、生活指導もある、部活もある、オランダの学校に行ったときに、一緒

に行った校長先生たちがみんな驚いたのは、給食の時間ですかね。これは地域の親たちが来るんです。先生はみんな職員室に引っ込んじゃうと。だから、やっぱり授業をするというのに全てをかけて運営されているように感じました。

その点で、先生のほうがもっともっと自分で授業の準備をしたり、子どもにかかわったり、そういう時間を拡大していくために、ICTの導入というのは、本来ならプラスになるはずなんですが、逆になる懸念も、ちょっと心配なども時々、皆さんの声ではあったかと思うんですが、いかがでしょうか。

○松平委員 学校現場では、新しいものを導入することに対して非常に抵抗があります。それも、年配の教員であればあるほど抵抗が大きいと思います。でも、今、学校で一番問題というか、課題は、教員間のコミュニケーション不足です。昔であれば、子どもが帰ると皆がストーブの周りに集まり、若手の教員は悩みを相談し、ベテランの先生が経験に基づいたアドバイスをし、後日若手教員がそれを子どもの指導に生かすということがありました。ですが、今はそのような交流はほとんどありません。一緒に飲みに行こうと誘っても、断られるのが一般的です。そうしたコミュニケーション不足の中で、それこそICT機器導入は教員間の潤滑剤となり得ます。教科の指導方法についてのノウハウはベテランの教員の方が圧倒的にあります。これまで培ってきたたくさんの引き出しがあるわけですから、問題点も含めてそれらを若手に伝授する。若手はICT機器を有効に活用した解決方法を考える。指導方法の工夫・改善を通して若手教員とベテラン教員のコミュニケーションが図られるわけです。ICT機器の導入は、さまざまな形で学校に効果をもたらすと思います。

○保坂区長 昔飲みニケーション、今LINEということなんですか。確かに先生同士がほとんど話す機会がないという話もよく聞きますけれども、ぜひ先生同士もともに情報をシェアして取り組むようなことってとても大切だなと思います。

時間も少し押してきているんですが、あと5分ほどで終わりたいと思いますが、亀田委員に、やはりいろいろ教育にかかわってこられて、世田谷区の学校、これは、まずは子どもたち、そして保護者、学校の先生、地域、丸ごとやはりもう一歩前に出るということでも変わっていくと思います。何かその兆し、可能性について、私はかなりこういう議論を大勢の方に集まっていたいて、たびたび重ねていることで、だんだんと広がってきたようにも思えるんですが、その点、いかがでしょうか。

○亀田委員 ありがとうございます。区長おっしゃるように、きょうこうして皆さん集ま

っていただいて、議論して、これまでも学びの質の転換ということで議論していたことをさらに進めていくことができると思います。その大きなきっかけとして、このICTの活用というのがあるんだろうと。

先ほど浅野さんから、これは道具であり、しかもそれは魔法のつえであるというお話がありました。とすれば、それを使って、世田谷でどういう教育を目指していくのかと、それをはっきりさせて、区民の皆さん、そして学校の先生、お子さんたちも含めて共有していく必要があるんだろうと思います。

知の創造というお話もありました。私はそれは多様性の中から生まれていくと思っています。それぞれのプラスやマイナスを重ね合わせたり、掛け合わせたりして、それによって課題の解決策をみんなでプラス、マイナス、重ね合わせながら考えていく、それを試していく。その前提として、いろんな考えとか違う考え、そういう考え方も大事だよねという、その多様性を認めていくということ、ぜひ世田谷の教育として発信をしていきたいと思っています。

そのために、今ここで話している、皆さんで議論しているような中身を具体的に進めていくためには、環境も必要だと思っていて、今皆さんの議論の中でもなかなか端末が足りない、なかなか使えないというお話もありました。浅野さんからは、それは今、国として検討いただいているというお話がありましたので、国の動きに呼応する形で、世田谷としても、その整備を進めていただきたいというか、進めていきますというか、きょう区長もいらっしゃいますので、ぜひ世田谷として、それこそ全国に先駆けて、そうした端末、ICT教育環境の整備を進める。それによって多様性ということ、世田谷の教育として打ち出せたらいいかなと思っています。

○保坂区長　まとめに入っていくんですけれども、教育長のほうから、実はいじめを許さない、見逃さない、いじめについて傍観している子に注目するというプログラムをやっている先生がいらっしゃいますよということで、こういった総合教育会議や教育推進会議などで今後のテーマにしてはどうかというお話がありました。

今、日本が直面している教育の課題の中で、浅野室長からもありましたけれども、シチズンシップ教育、やはり小さな市民として主体的に自分の意見を言い、言ったことが間違っていたらそれを修正できる。そして、友達と何人かで考えてもみなかった意見をつくり上げる。こういうことと逆の、ある種避難所の状態ですかね。とにかく先が見えない、誰もがこう不安を抱えながら、そして中には命を絶つという事件も日本全国では起きていま

すけれども、そういうことで、そのシチズンシップ教育という観点でこのこともやっていきたいんですが、きょうのまとめとして、ぜひ教育長が浅野室長のお話を聞いて、例えば自分の力でやれたという経験が大事だよねとか、説得する力、コミュニケーション、チームで取り組んでいく。そしてそれを現実化していく。うまくいかなかったら引き返してまた挑戦する。そういう文化というか、時間を子どもたちが持つ。

また、個別最適化の教育、今、亀田委員がおっしゃいましたけれども、大いに時代の変化を背景にしてでも、その機材というか、ICTという技術だけに引っ張られるのではなく、むしろ澁澤先生がおっしゃっているような教育の原点、そこに立ち戻って、世田谷はこれを目指すんだみたいなことをぜひ文章化していただいて、提示して、また議論していきませんかという問いかけなんです。

○渡部教育長 今の区長のお話が、私が何をしゃべればいいのかとちょっと悩むところではあるんですが、私はこれからの教育で大事なものは、やっぱり多様性を理解して、そして相手を尊重する力、先ほどお話の中に、AIにはできない力っておっしゃっていたことです。だから、ICTは道具として私たちが使いこなすためにある。だから、子どもの心を育てるために、先ほどいじめの話もありましたが、そういうふうに相手を尊重する心を育てるために使う道具であって、それはツールであって、そしてそれによって生み出されるもの、それは時間かもしれないし、個別最適化された教育かもしれない。それか、その生み出された時間によって、私たちが子どもとかかわる時間かもしれない。そういうふうなところで、ICTを私たち自身も使いこなせるようになっていくことが一番かなというふうに思っています。

きょうは教員の方たちだけではなくて、区民の方や公募してきた方たちとも活発な議論を交わすことができたので、私はこれから世田谷の教育をそういう形で、どういう教育を目指すのかということこれから示していけるといいなというふうに思っています。

○保坂区長 ありがとうございます。実は私、今から三十数年前は教育問題を専門とするジャーナリストをしておりまして、主に90年代に出してきた本はいじめについての本だったんです。いろいろな事件が起こると、テレビ等に出て、レポートしたり、ディスカッションしたりということが多かったんです。そのときに、本当にだんだんだんだんこのパターンからどうにか抜けられないのかと思ったのは、大きな不幸な事件が起きたときに、必ず出てくるのがやっぱり教師が悪いんだと、もう1つ言えば文部省が悪いんだと。かと思うと、親がだめなんだよという話、そして子どもの質が変わったと、子どもがもうめち

やくちゃだと、誰が悪いかというのをお互いがわあわあ言い合って、そろそろ時間でございますと、話は十分尽きませんでした、また次の機会をというシンポジウムにさんざん出ました。これでは全然よくならない。誰が悪いと言っているその文化が悪いんですね。

ということをちょっと最後のまとめの言葉にして、ぜひみんなで力を合わせていくと。教育がよくなることに対して、嫌な思いをする人はいない。1人1人が尊重されて、しかも新しいツールも使いながら、そこで生まれた時間や、あるいは子どもたちの関係をより豊かなものにしていく。そして親子の中にも対話が生まれる。ICTだけで全てが解決するとは思いませんけれども、世田谷型のICTとのつき合い方、向き合い方、そして取り入れ方というのを教育委員会と一緒に積極的に追求していきたいと思います。

浅野室長、最後までありがとうございました。

参加していただいた皆さんに感謝を申し上げて、終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

○司会 以上をもちまして、総合教育会議・教育推進会議のほうは終了となります。皆様には長時間にわたり御参加いただきまして、まことにありがとうございました。

お帰り際には、アンケート用紙のほうをぜひ受付のほうに提出の上、お帰りいただきますようよろしくお願いいたします。お忘れ物などないよう、お手回り品に御注意の上、お帰りください。

本日はまことにありがとうございました。

午後4時39分閉会